

被爆 70 年ナガサキ原爆写真展 7月22日～8月3日

Foot print
フットプリント

写真資料調査
部会発行
H27.10.01

2015年
第20号

展示写真一四〇点余り 多くの反響
途切れなかった市民の姿 三五八三人来場



新興善国民学校。校庭に積み上げられた机椅子



写真展に向けての準備作業(部会室)

長崎市立図書館で開催した「被爆70年ナガサキ原爆写真展」、会場を訪れた70歳代の長崎市の婦人Tさんの感想です。「幼い時の被爆でしたので、実写真を見せて頂き不明の点がわかり大変感激しました。新興善小学校が再開の時、寺町・皓台寺から一個ずつ椅子を持たされ、行列して学校に行ったことを思い出しました。」

「写真展」で展示した新興善国民学校の写真は、原爆投下から間もない昭和20年秋に撮影されたもの、アメリカ国立公文書館で収集した一枚で、校庭には児童用の机と椅子が山のよう

に積み上げられています。

今回の会場、長崎市立図書館はかつて新興善国民学校が建っていたゆかりの場所、終戦後は被爆者の救護所となったため、学校は寺町の皓台寺に移りました。Tさんの思い出は敗戦から6年の歳月が流れ、国民学校が小学校と名前が変わり、学校が元の校舎に戻った昭和26年12月のことではないでしょうか。

写真資料調査部会が昨年から準備を進めてきた「被爆70年ナガサキ原爆写真展」を、7月22日から8月3日までの11日間(途中1日休館日)、長崎平和推進協会の要望を受け市中心部にある長崎市立図書館多目的ホールで開催しました。

初日は主催する3団体代表、(公財)長崎平和推進協会・横瀬昭幸理事長、長崎市立図書館を代表し長崎市教育委員会・上野美也子教育総務部長、それに深堀好敏部会長の3人がテープカットを行いました。

会場に入るとまず目に飛び込むのは長崎原爆ファットマンのおよそ2分の1の大きさ幅2.7メートル・縦1.3メートルの巨大写真です。会場はファットマン・コーナーに始まり、爆心地一帯の惨状、カラー写真に見る爆心地一帯、長崎市中心部・南部一帯の惨状、原爆投下翌日に撮影された山端庸介写真、登録記念物・原爆遺構の6コーナーに分けて140点余りを展示しました。

前回、十年前の「被爆60年展」ではA3サイズで展示しましたが、今回は一回り大きいA2サイズに統一しました。さらにパノラマ写真を多用し、これまでの写真展では浦上天主堂、城山国民学校等、個々の惨状を中心に展示していましたが、今回は広域の破壊状況が分かる写真としました。

パノラマ写真の最大ものは城山町八幡神社裏の高台から撮影した、城山町・爆心地一帯・山里町・鎮西中学を写した幅5.4メートル、縦90センチの超大型写真、爆心地を中心におよそ北から南までの2キロにわたる廃墟が目の前に広がっています。

(次ページ5段へ)



深堀好敏部会長ら主催三者のテープカット



ファットマン特大写真の前に立つ田上市長と部会スタッフ



大型パノラマ写真が展示された会場

会場アンケート 開催期間中238人の 来場者の皆さんが感想を寄せる

「被爆70年ナガサキ原爆展」

では、会場の一角に感想を書いていたアンケートコーナーを設けました。訪れた人の中から238人の方が、それぞれの感想を書いてくださいました。主な感想をご紹介します。なお感想の中で目立ったのは、現在の政治に対する不満の意見を、数十人の方が書かれていたことをお知らせします。

50代女性 長与町日さん

圧倒されました。残していかねばならないもの、でも残せない、残せなかったもの。会場を訪れましたが写真の力は大きいと思いました。言葉で伝える、目で伝える、心に感じる、継承していかなければと思います。

70代女性

住吉町で被爆、その時のことはよく覚えています。兄の友人が電車の運転をしていて(学徒動員)亡くなったことを聞いていました。展示されている電車の写真、跡形もなく破壊されている様子を見て涙が出てきました。あの原爆のため、多くの人命や財産が失われたことに深い悲しみと怒りを覚えます。

70代男性

悲惨としか言葉にできません。それでも世界も日本も同じ繰り返しをしようとしている

と見えるのは私だけでしょうか。私も被爆者です。

40代女性

米軍がファットマンを飛行機に乗せている写真、この一つの爆弾で何万人もの人が亡くなり、今でも原爆症で苦しんでいる人がいる。

小学生女子

10kmもはかいする力が原子ばくだんにあつてびつくりしました。外国の人はひどいひががあるようにと、住宅街をもくひようにおとしたのは、わるい考えだと思います。夏休みの宿題にげんばくのがたので、ぜひかつようしたいです。

中学生男子

原爆をアメリカが落としたのは許せないことです。私が通う淵中学校も被爆して今年70年、原爆はこの世界から消えて欲しい。私たち若者はこの話はテレビドラマではなく事実だということを知って欲しいです。

80代女性 長崎市Fさん

学徒動員で「〇ハ工場」に行っていました。私の同窓生も何人が亡くなりました。とても悲しいです。天主堂下にいた亡くなった友達のこと、写真を見て、こころ辺りだったので、と思ひ泣きたくなりました。

70代女性 長崎市Mさん

当時10歳、東小島の自宅で被爆した幼い時の記憶が再び思い出され、当時の様子がよく理解できた。昭和23年、城山小学校校庭に建てられたプレハブ校舎で学びましたが、そこが亡くなられた人々を火葬した場所とこの写真展で知りました。心からご冥福を祈ります。

50代男性

原爆投下の前々日の写真が存在することを初めて知りました。

60代女性

原爆投下2秒から3秒で、あつという間に世界が変わる恐ろしさ！こんなことを再び繰り返さないように。

(前頁から)

また会場が長崎市立図書館でしたので、これまでの写真展では割愛してきた市中心部・南部方面の写真も一つのコーナーとして40点を展示しました。これらの写真のほとんどは長崎市の写真館主・小川彦彦氏が長崎県の依頼で、当時の政府に被害状況を提出するために撮影したものです。その他に今年で3年目となる長崎市の事業、アメリカ国立公文書館所蔵の原爆関連写真収集で持ち帰った3000点の写真の中から、部会が厳選したカラー11点、モノクロ38点も初めて本格的に公開しました。

今回の写真展には多くの市民が来場されました。このことは事前に展示写真を連載で紹介した長崎新聞社、初日に会場から生中継したNBCテレビ「あつぷる」、それに各テレビ局もその日のニュースで紹介、各新聞も翌日に写真展開催を報じました。会場に市民の姿が途切れなかったのは、市民の関心の高さとマスコミの協力があつたことが大きな要因だと思います。

(副部会長・堀田武弘)

6歳 男子

(たどたどしい字で) かなしかったです。

40代女性

カラー写真が印象に残り、当時の日米の国力の差を思い至りました。義母は当時、報国隊として三菱電機で働いていましたが、その日、命からがら連絡船で対岸へ逃れたという話を聞いています。

50代女性

資格取得勉強のため、たびたび市立図書館に来ています。写真展のことが気になります。写真展のことが気になります。今日拝見させていただきました。改めて心に留めておくためにこのような写真展を定期的に開催していただき、目体に焼き付けておかないといけないと痛感しました。

80代女性 長崎市Eさん

70年前のつらい悲しい思いが、写真を見て新たに思い出されました。悲惨な死を遂げた妹、弟のことがつらく、何とも言えない気持ちです。

70代男性 長崎市Kさん

親類にも沢山の被爆者がいます。今の政治家は戦争を知らない人が多いので、その苦しみがわからないと思います。私たちが声を上げないとだめです。いつまでも平和な日本でありたいと思うばかりです。(同趣旨の意見を数十人の方が記されていきました。)

60代男性

リアルな記録は言葉では通じない。写真は真実を伝える素晴らしい媒体として証拠になる。アメリカは実験として原爆を投下したことははっきりとしているが、まさにこれは貴重な証拠である。現在は政治が混乱しているだけにインパクトのある写真展です。

60代女性

父がよく言っていたその時の爆心地そばの松山橋から見た自宅の様子、今日、写真展を見て言葉に言い表せない思いです。父のつらさが…、本当につらかったのですね。父の思いを私もつなぎます。

70代女性 長崎市Yさん

展示されている多くの写真、百の話を聞くことも大事ですが、一見すればすべてを語ってくれます。投下予定地点がずれたことで今の自分があることを思うと、生きていくことが不思議です。原爆を落とす方も、落とされる方も地獄です。戦争は何があってもしてはいけません。

60代女性

岩屋山の姿は変わりませんが、私にとって原爆は、目標地点に落ちて欲しかった。

40代女性

毎年、原爆資料館に子ども達と一緒に見学に行きます。私が子どもの頃はまだ被爆者の話を聞く機会があり、戦争が怖くてたまりませんでした。しかし、段々戦争を体験された人たちが少なくなり、子ども達も戦争のとらえ方が変わってきているような気がします。恐ろしいです。戦争もそうですが、過去を忘れてしまうことも恐ろしいです。

50代女性 長崎市Nさん

一般人である長崎市民が、なぜあのように傷つき、殺されなければならなかったのか。原爆は人を殺す残酷な兵器だということが良く解りました。

40代男性

長崎に原爆投下を報じる8月10日の新聞、記事の扱いの小さいことに驚きました。

60代女性 長崎市Sさん

被爆七十年、御霊よ、安らかに眠れ、天災・病・七万余の尊い命、平安を！

女子高校生

小学校や中学校で平和教育があり、沢山の写真を見る機会がありました。しかし今日は違う感情で見ることが出来ました。「この子、この時、どんなこと思っていたんだろう」「ここにいた人たちはどこに行ったのだろう」など、たくさんの疑問が出てきました。

30代女性 長崎市Tさん

原爆投下前と投下後の上空からの写真を見て、地上の風景が全く変わり、何もかも無くなった様子が印象に残りました。戦後70年となった今、戦争を体験された人、原爆に遭われた人がご高齢となり、その体験を聞く機会が少なくなりました。世界では今でも紛争があつていますが、とても悲しいことです。原爆、戦争はとても恐ろしいものだということを再認識しました。

80代女性 長崎市Uさん

学徒動員で三菱兵器大橋工場に通い、毎日勝つことを念じて働いていましたので、気持ちはその頃に帰りじつくり見せてもらいました。8月9日はかろうじて助かり、展示の写真を見て、その日の様子が手に取るように蘇ってきて、胸が熱くなります。家族を亡くし、多くの友人を亡くしましたが、その人達の犠牲で生き残り、世の中に貢献できることを心に誓っています。(まとめ担当・堀田武弘)

写真展 初公開した城山小学校関連・慶華幼稚園 原爆前の子どもたちの姿

写真展ではメイン写真のそばに展示したため目立たなかった被爆前の写真だが、来場者のアンケートの中には、これらの写真を見て思い出がよみがえり懐かしかった、という声が多く書かれていた。写真資料調査部会が個人から借用した、ほとんどが初公開の写真である。

①城山尋常小学校時代

卒業写真（昭和11年）
この写真は城山尋常小学校時代の昭和10年度の卒業写真存在はまれである。



上・卒業写真、写っている子ども達の多くは爆死したのではないだろうか。

中・「子らのみ魂よ」が初めて歌われた除幕式。



思い出のほとんどが消失した慶華幼稚園

「長崎原爆学校被災誌」は「うっそうとした自然林、中庭の小高い丘一帯には椎、樫、椿、棕などの大樹が茂り、子ども達は秋には木の実をひろい、冬には椿の花を拾って楽しんだ。しかし原子爆弾は思い出の樹木も、一瞬にして根こそぎ吹き倒した。」と記している。

②城山小学校「少年平和像」

除幕式（昭和26年）

原爆で亡くなった城山小学校の子ども達を追悼する歌「子らのみ魂よ」、この歌を作曲し、城山住宅に住んでいた木野普見雄氏は自著で次のように記している。

「コンクリートは折り重なって倒れ、その間に鉄筋は飴のようにねじれて残骸をさらし、わずかに一階あたりに窓の形が認められる程度…。9月の第二学期が始まったが、校庭には草木一本とてなく、空虚な廃墟と化した哀れさで、登校する学童の姿も見られない有様であった」（「原子野のうた声」）

さらに、「この地区の自治会長で原爆生残りの杉本亀吉氏は学校の復興に尽瘁、原爆でやられた先生と児童たちのみ霊を慰め、かつは平和のシンボルを打ち立てたいと、僕らの平和像」建立を計画、その作製を長崎市出身の富永直樹氏に依頼した。…」

“僕らの平和像”（「少年平和像」）除幕式は昭和26年8月8日に行われた。

登録記念物コーナーに展示した現在の「少年平和像」、そのそばにこの写真を展示、左から木野普見雄、富永直樹、島内八郎、不明の各氏。この日の除幕式で初めて歌われたのが「子らのみ魂」である。

③慶華幼稚園卒業写真

（昭和10年頃）

今町にあった慶華幼稚園（現・長崎南社会保険事務所付近）、創立は大正12年4月、浄土真宗の教えの下に幼児教育を行っていた。しかし原爆による二次火災で延焼し、ほとんどの記録が失われた。展示の写真は、この幼稚園で先生をしていたS氏の家庭に残されていたアルバムの中の一葉、写真展のためにお借りした。この幼稚園の卒業写真は園庭にあった滑り台を囲んで写るのが恒例だったようだ。

アメリカ国立公文書館所蔵写真にも残っているが、原爆後のこの幼稚園の廃虚写真には、独特の半円形の壁が残っている。関係者は教会風のドームがあった建物だったと語る。お借りしたアルバムには、この他にも広い遊戯室で行われていた花祭り等を祝う演芸会や、滑り台付近での先生たちの記念写真も残されている。

（堀田武弘記）